

■ みずつち座談会 第1回プレイベント

角館まさひで×曾我部昌史「あかりからのまちづくり」

—とやの潟で行う照明実験から都市と建築をつなぐあかりの手法—

出演：角館まさひで（ぼんぼり光環境計画、本芸術祭参加作家）

曾我部昌史（本芸術祭建築ディレクター）

日時：平成27年6月5日（金）午後7時から

場所：新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」講義室A



（曾我部）

今回の水と土の芸術祭2015では潟をメインフィールドにしており、建築的な視点でアートに挑もうというところがあります。それは、潟を初めて文化建築的な方向で売り出しているということで、そのうちの 하나가、今回の角館さんのプロジェクトです。

角館さんは照明デザイナーなので、僕も角館さんに照明デザインしてもらったプロジェクトがいくつもありますが、その場合は主に建築の内部、あるいは外部のショーアップするための照明の仕事が多いです。今日は主にまちづくりにおける照明を中心として紹介いただくとお聞きしていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

（角 館）

僕も建築学科出身で、建築が大好きな中で照明をやり始めました。お配りした冊子が2種類あって、青い印のものと赤い印のものがありますが、青いものは建築系です。今、一番大

きい、「あべのハルカス」という日本一高いビルを、皆さん知っていますか。今まで一番高かったビルは横浜にある「ランドマークタワー」です。今までずっと日本一だった「ランドマークタワー」を、今回「あべのハルカス」が抜かしたのです。

このように建築をやっている中で、光というのは、結局、領域を超えていくのです。例えば公共の照明も建築の照明も、公園の照明も周りに漏れたりして、実は景観という概念になります。景観という概念はどちらかというに見えるもので、見えるもの全部をトータル的にしていこうということですが、日本ではやっとな数年前に景観法というものができあがり、非常に遅い動きをしています。そのような観点から、光というのはいろいろな可能性があると思います、独立した後、まちというものをテーマにしなが、並行していろいろなものを作ってきています。それをご紹介しつつ、今回、鳥屋野潟で何ができるのか、何が起きるのかをお話しできたらいいかなと思います。

<あかりの持つ力>ということで、1枚のスケッチについて最初にお話しします。原子砂漠の1枚のスケッチです。原爆が投下されてから1か月後に描かれたスケッチで、夕暮れになった広島のみち、暗くなった焼け野原にあかりが灯りました。このあかりというのは何だろう、何でこの人はこれを見て感動したのかということ、これによって広島というまちが、また動き出す、再生していく、また、復興していくという一つのシンボリックな意味合いがあり、要するにあかりの向こう側には人が生活し始めている、あかりイコール人の生活がリンクしているのです。なので、自動販売機が並んでいてもまったく感動しなくて、こういうあかりだからこそ、実は感動したのだと思います。照明をデザインするといっても、ただライトアップをするのではなく、この裏側に何を感じるかというところを大事に仕事をしています。人の生活、必ずそこにはあかりがあります。私たちにとって、目に見えるものがあり、やはり夜活動するには、人工の光が必要になってくるということです。

<場をつくるあかり>というものを今までいろいろやってきました。例えばイベントがあったときなどにも、場をつくると言っていますが、そこで座ってみんなでしゃべったり、食事をしたり、何かを飲んだり、そういう時間を過ごす場所に対して、どういう感動に出会ったらいいのか。

これは、釜石です。震災の1か月後くらいで、水に流されてしまった住居の部分です。そこに地域の人が集まれるような場所を作りました。これを作ったら実際、地域の人が集まってバーベキューをしたりして、そこでまた今後どうしていこうかというような話をしていました。



Twinkle Feels-きらめく二人の心- 天祖神社ライティングイベント

これは特殊な例ですが、イベントで、豊島区の大塚駅のそばの天祖神社に夫婦イチョウというのがあり、そこのお祭りです。そこを、ただライトアップするのではなく、そういう雰囲気を作りつつ、テーブルをおいて人が集まれるような場所を作ります。実際、人が集まってみんな座っていますよね。今こういうベンチというのはないのです。ホームレスの人が寝ないように、長いベンチは作れないのです。ブロックみたいにバラバラにしたり、間に何か立てて寝られないようにする。ところが、昔、僕の小さい頃は、平べったいテーブルみたいなものが公園にあって、学校から帰ってくると、ランドセルをそこに置いてしゃべったりとかしました。椅子だけでも、テーブル扱い、物置きでもある、そういう空間。実際にこのようなものが集まって、おもしろい場ができました。

クリスマスや誕生日パーティなどでは、部屋の電気を消してろうそくの光を囲んで歌ったりして、ふっと消します。機会があったら、そのときに、テーブルを囲んでいる人たちの顔がどういふふうには照らされているかを見てもらうとおもしろいと思います。どうしてもケーキに集中してしまうのですが、そのときに囲んでいる人たちの顔がろうそくでライトアップされている光景、そこには特殊な空間が生まれていると思っています。

<陰影のあかり>。日本の建築というのは凹凸があるのです。そういう凹凸に合わせて光を置いていくだけで、実はそのまちの特徴が非常に明らかになってきます。これなどは、ライトアップしていると感じるかもしれないのですが、ボリュームが認識できるようところに光を置いているだけです。まちなみのまちが凹凸しているところの、特に凹んでいるところに少しあかりを置き、凹凸感を認識させようという試みです。このようなことを実験しながら、まちの照明計画などもやったりしています。

(曾我部)

街灯のように道を照らすのではなくて、建物を照らしていくのはいかに特別かというのを

もう少し説明していただけますか。

(角 館)

日本の今の制度は、結局、公共の空間というのは行政が管理し、民間の敷地は民間の人が管理するというのが通例なのです。逆な言い方をすれば、公共の空間に民間のものはみ出すということはありません。

街路整備をするときには、必ず地域の人たちと議論して、照明をどうしましょうかと聞きます。すると一般の方々は、明るいか暗いかの選択肢しかないのです。そして皆さん明るいほうを取ります。なおかつ、国土交通省に技術研究所というのがあって、実は今回の被災地でも全部そうですが、土木の世界にはすごくがっちりとしたルールがあって、悪い言い方をすると、土木系の方が儲かるような、周りの人は口出しできないような、うまいルールづくりがあります。そういう中に照明だとかがあったりして、公共と民間は分かれて計画していくというのが通常なのです。＜陰影のあかり＞での照明の考え方は、民間の敷地に公共の照明をみんなをつけていきたいと思いますということになります。これは今までの日本にはない事例で、そのために、照明実験をして、住民の人、行政の人、両方に納得してもらって、みんなで行きましょうという雰囲気を作っていました。またあとで、具体的な話をします。



岩手県大野村夢あかりイベント 2001

岩手県大野村では、公共にこういうものを設置しているのですが、これはまちの暗闇をなくすことが防犯性をアップするということが分かっているので、こういった照明をつけているのです。裏テーマとしては、水を感じるという話にもなります。水の話は、またあとで出てきます。

富山の八尾でもこういうあかりを作って、実験しています。このような実験をしながら地

域の人、僕は実は地域の人の中でも行政の人から、まず納得してもらおうということをいつも心がけています。

これは釜石の仮設商店街です。これを見てお話ししたいのは、こういうプレハブの工場建築みたいなものも、あかりによってがらりと雰囲気が変わるのではないかということです。あかりの魅力にはもう一つあります。見せたいものと見せたくないものを線引きして、見せたいところにあかりを置くだけでいいのです。それで調整ができます。なおかつ、照明のもう一つの魅力は、日中見えている材料や、色などがあまり感じなくなるのです。要するに、これは日中見ると、典型的な現場事務所みたいな感じなのですが、夜になると、見せたいところだけをうまくコントロールすることができるという魅力があります。一挙に変わると、リゾートみたいなこと、これなどもすごく演出しているような感じがしますが、実はこれは一つのルールで照明を設置しています。何かと言うと、歩いてつまづかないようにあかりを置いています。実はつまづく場所ということは、ぶつかるつまづくという建築空間やランドスケープの空間の一番特徴的なデザインがされている場なのです。言い換えたならあかりを置くだけで、デザインされているところが、浮き出し、なおかつ、性能的に安心する、そういう手法をよくとっています。

次に、＜物語のあかり＞。物語というのは、まちづくりで定番なのですが、地域の人がどれだけ自分のまちを好きになれるか、その裏側にどういうストーリーがあるのかということです。一般的に物語と言っているのは、一昔前までは歴史とよく言っていました。歴史をちゃんと学ぼう、地域の歴史を学ぼう。しかし歴史といった瞬間に、江戸時代とか、皆さんの意識が遠いところになってしまうのです。物語というのは、例えば私のおじいちゃんが、昔、ここで何をやってたのか、お父さんが何をやってたかという二、三十年くらいのスパンのことを言いたいのです。



相倉集落冬のライトアップ

ですから世界遺産である五箇山みたいなところは、いろいろな歴史を持っていて、物語があって、このようなライトアップになるのです。岐阜県側の白川郷と富山県側の五箇山の相倉集落は、合掌造りとして世界遺産に登録されています。しかし、白川郷のほうが商業がうまくて、合掌造りの世界遺産というと、皆さん白川郷をイメージしてしまうのですが、同時に世界遺産に指定されています。そこで、観光協会から相談があり、何かできないかと言われてやったのが、これなのです。これは、人気を感じるようなあかりをつくって、防犯性を高めるような照明実験をしました。

実はここは人がけっこう住んでいて観光で食べているのですが、プライバシーが侵害されるから、夜、人が来たらいやだというのです。矛盾しているのですが、防犯性を高めるように照明実験をしましょうといった瞬間に、さすがにそれはだめという人はいないのです。実際に行ったら、地元の人は大喜びで、毎年勝手に続けています。



Twinkle Window Yamate 横浜 山手西洋館 Christmas illumination 2007

これは、横浜の山手地区です。港が見える丘公園や外人墓地といわれる山手があります。横浜が開港されたときに、西洋のお金持ちの人や権力のある人が丘の上に家をいっぱい造りました。今は行政が管理していて、美術館やいろいろなイベントスペースになっています。そこでもクリスマスイルミネーションをやったのです。ここに西洋の方々が住んでいたら、どういうクリスマスを祝っているのかをみんなでイメージしながら作りました。何となく家の中からあかりが漏れるような、きっとあそこのタワーの2階はリビングルームになっていて、ファミリーが集まって、お友達を呼んでクリスマスパーティをやっているとか、そうい

う中から漏れるような雰囲気というものをここで作ったつもりでした。

日本の光の文化で有明行燈というものもあります。箱の上に灯火部を乗せていると明るくて、ぽとんと下に落とすと、三日月とかのグラフィックが出て暗くなる、昔の調光器なのです。要するに光の明るさを調整しています。今だったら、デジタル的に行ったりするのですが、昔はハード的に行った、そういう文化が日本にはありました。これも一つの物語といえます。

これは、思い出ちょうちんというプロジェクトです。こういうふうにあかりを置いているのですが、このときのあかりの実験は、先ほど言った、まちの暗闇をなくするというものです。非常に行政的なアプローチなのですが、地域の人が喜ぶようにということで、100円ショップで買って来た提灯に関係している全員の写真を「すごい昔」と「少し昔」と「今」みたいなテーマで貼りました。そうすると、あそこはあのおばあちゃんがいたよねとか、ここは今、赤ちゃんがいるんだとか、そういうその家の歴史を感じながら、みんなで見て歩くということをしました。

これはイメージ写真です。滋賀県の守山にホタル祭りがあります。昔、ホタルの里というのがいっぱいあって、僕みたいに東京の人間はホタルというと敏感になるのです。いろいろ調べて、ホタル祭りを見に行きました。夜、車で出て、5時間くらいすると京都あたりに行けるので、夜中の1時くらいに三脚を持って、そのまちを歩いていたのです。そしたら、犬を散歩しているお婆さんが、どこから来たのだと言うので、東京から来ましたと言ったら、そのお婆さんが、もっと早かったら天ぷらを揚げたようにホタルが舞っていたのよと自慢げに言うのです。これはやられたなと思いました。その次の年にインターネットで調べて、梅雨明けの少し温度がぐっと上がったときに巨大発生するというので見に行ったら、天ぷらを揚げたようにホタルが舞っていました。何が言いたいかというと、地域の人が自分のまちをどれだけ自慢できるか、このような地域性というのが大事なポイントになっているのではないかと思います。



TWINKLE SNOW/新宿サザンテラス

<発見するあかり>、これは物語に近いのですが、あかりによって見せたいものを見せることによって何が生まれてくるのかということです。例えばこれは新宿のサザンテラスでのイルミネーションなのですが、このテーマは雪が積もったようなイルミネーション、すなわちその地形や植栽の形に合っているようなイルミネーションです。裏話をすると、これにはすごくメリットがあり、イルミネーションの量が半分で済む、予算的にも安く済むという、そんなテーマもありました。

あとは、発見するという意味で、あかりを変えると夜も見えるようになる。だから例えば青森檜葉の樹齢200年くらいの杉の木があって、そこに光を与えたり、神社みたいなところも少し光を与えて、裏側の樹木も少しアップライトして奥行き感が見えるようにする、そういうまちのワークショップをやりながらも、地域の人がふっと喜ぶようなひと手間をかけたものです。

<人気のあかり>。結局、人がいるということが実は防犯的に一番いいのです。例えばコンビニエンスストアには、年間10万件くらいつけ狙われた人が行っているらしいです。何かつけられて不安だと思って立ち寄っているのを含めると、もっと多いはず。交番よりもコンビニに行っている人のほうが多いのです。なぜならば、今、都心の交番では、約半分くらいが、交番に行くといないで電話しろと看板が出ているのです。人につけられてやばいと思ったときに、交番に行って電話なんかしてられないですよ。それだったら、コンビニに行ったほうがいい。それは人がいるからなのです。

これは上野の谷中で行った実験で、まちにいろいろな色をつけてあかりをつけました。窓から漏れる光は暖色系、要するに黄色とかオレンジとか赤い色、直接見えるような光は寒色系、要するに青色とか緑色を使いました。別の言い方をすると、暖色の明るい光というのはプライベートな光で、個人的な光、青い光というのは、非常に公共性の高い光なのではない

かということです。まちにはこのような二つの光がありますよということをインスタレーションで実験しました。



窓あかりの美しい街・川越

川越に「一番街通り」という古い蔵造りのまちなみが残っているところがあるのですが、そこでこんなことを行いました。街灯を全部消して、お店が閉まっても、あたかも人がいるような美しいあかりをみんなで作っていきましょうということを2000年に行いました。実際にアンケートをとると、女性が歩いていて断然こっちの方が安心感があるという結果になったのです。要するに、犯罪の抑止力として当然順当であるという判断が当時なされたのです。

しかし、このときは2階の窓のあかりは人気を作って防犯性を高める光であり、そのための電気代の支払いに関する問題まではまだ解決しなくて、そのまま流れたという経緯があります。

やはり中から漏れる光というのは、日本の特に古い文化や、木造建築、日本の様式の細かい詳細を非常に浮き立たせるというメリットがあるのではないかと思います。

このようなことを八尾や石川県の和倉温泉でも行いました。バブルのころは、団体客の大量のお客さんを何百人とボンと入れて、そこで飯を食わせて飲ませて寝かせて、お土産を買って帰るという一つのパッケージがあり、そこは温泉アミューズメントになっていたのです。ところが、今は団体客がいなく個人客が多くて、リピーターを増やすためには、一言で言えば、まちを好きになってもらわないといけない。まちを好きになってもらえると、実はお客さんのリピート率が上がるのです。和倉温泉には七福神というのがあり、夜にも七福神めぐりができるようにしましょうというように、まちに人気を作り、にぎわいを感じるような、要するに夜に歩いて楽しい、いろいろ発見ができるまちを作ろうということで、加賀屋の女

将さん等と一緒にいろいろ行いました。

これは、釜石の宝来館というところで5月くらいに行ったものです。宝来館には、震災のときに2階まで水が来ましたが、たまたま一人も亡くなっていません。みんな裏山に避難しました。この裏に通りがあって、ここは海なのですが、こちらの通りの先に集落があって、この道はけっこう集落に通う住民の車が通るのです。それで、こういうあかりを作りました。要するに、人はいないのですが人がいるような雰囲気を作りました。そうすると、地域の人たちは大喜びで、また何かあったら宝来館に来れば安心だよと、何かあったら宝来館でいいよねと再認識しました。やはり地域の大きな施設、本当は学校などの公共施設がいいのですが、こういうふうな旅館がぽつんとあるところは、地域の人にとっては何かあったら集まる場所になります。そういう場所が、震災直後にこういう形で人気を感じるということが、非常に有効だったことを実感しました。

昔のSF映画は、けっこう人気を作ることをしていました。例えば「スタートレック」の宇宙船、こういう窓あかりは、全部光らないのです。ついたり消えたりしています。そのため、人がいっぱいいて、すごくボリューム感があるような雰囲気が伝わっています。昔からこういうことはあって、「スターウォーズ」などもそうです。ひかりがついたり消えたりしています。建築の世界では有名ですが、「ブレードランナー」という映画もそうです。もろに人気を感じるようにしています。

ビルディングのファサードが異常に光っているというのは、今だからこそ中国でやったりしていますが、当時としてはすごく画期的な一つのアイデアだったと思っています。昔のSF映画は、今みたいなCGグラフィックの技術がなかったので、未来都市をつくるときは、必ず夜景を作っていました。テクスチャー、材料の表面が関係ないからです。今、CGの技術が上がったので、日中の未来都市みたいなものも、コンピュータグラフィックスによってできるようになってきました。一番いい例が、「アバター」みたいな映画です。自然界の細かなランダムな動きみたいなものも全部コンピュータで処理できる、そういう時代になってきました。ただ、昔は、時間もお金もかけられないので、逆に未来都市というのはある意味、ごまかすために夜を使っていました。

次に、〈境界を無くす照明〉をご紹介します。先ほどの大野村のワークショップの最終的な成果です。民間の敷地内に照明が全部ついています。これはけっこう面倒くさいのです。ただ、このときは、大野村の担当者がその地域出身で、村自体も小さく、その人が道を歩くと、まちのおばちゃんが、〇〇ちゃんと声をかけてくれる。だから、その担当者が、最終的に300軒の家を全部回ってくれました。

これは釜石市にも提案している根浜海岸の通りなのですが、通常は電信柱に道路照明がつ

いています。しかし、そうではなくて、生き残った松林のほうに小さな光をおくというだけでも、十分性能的には満足できますよということを提案しています。具体的な話になりますが電信柱につけるのならば、昔だったら水銀灯の80ワット、今はLEDで10ワットくらいが必要です。でもこの光は0.5ワットのLEDなのです。10ワットのLEDをつけるよりも、よほどこちらのほうが省エネになる、そういうアプローチもしています。省エネといっている理由は、デザインといっても通用しない人もいるので、そういう人にはそれなりの照明で防犯性が上がる、安全性が上がるということを言わないといけないからです。

これは、新宿のMOA街の照明です。建物の上に看板照明と一緒に投光器をつけて、床を明るくしています。床を全面的に明るくしているのではなくて、部分的に明るくしています。なぜならば歌舞伎町の酔っぱらいの中に勝手に用を足す人がいるらしいのです。そういうポイントがいくつかあって、そこをなるべく明るくして、そのようなことを防ごうというものもありました。また、照明のデザイン的には、狭いストリートに高いビルが建っているので、そのスケール感が浮き立つといいねということで、ここに照明をつけようということを提案しました。

公共空間をどれだけ自由に使っているかというのは、実はまちのにぎわいには重要だと僕は思っていて、公共空間をうまく使っている風景は、やはり観光地としてうまくいっているのです。これなどは混雑していますが、こういう川べりみたいなところに人がいる風景はいいですね。京都の加茂川なども、あれは本当は違法なのです。でも、やっぱり公共空間にアクティビティな人の活動みたいなのが出ているまちというのは、非常におもしろいです。

これは、ニューオリンズというジャズバーのまちです。ここは道が真っ暗なのです。ここはどういうまちかというと、ジャズバーなのでジャズをやっているお店がいっぱいあり、バーの窓を開けて、道を歩く人から店の中が見えるようにします。ここの演奏を聴こうかなと思ったら、店の中に入ってテーブルに座り、テーブルチャージで飲み物を飲む。要するにお店にとっては、お客さんをなるべくそれで呼び込みたいのです。ここのまちの目的というのは、なるべく中で演奏をしている状況を周りの人に教えることです。照明がまったくないような、そういうまちです。

日本の風景はこうです。例えば銀座のまちは、看板照明みたいなものがずらっと並んでいます。香港はこうです。これはルールなのです。ルールというのは法則、決まりごと。日本では、建築の袖看板というのは、道路に壁から60センチ出していいというルールがあります。だから、みんなそのルールの中で目一杯顔を出すわけです。そうすると、そのルールいっぱい景観ができあがります。

中国とか香港では、路面から5メートルまでは出してはいけませんというルールがありま

す。上のほうに出していいとはいっていないのですが、5メートルまでは出してはダメですというルールなのです。ルールを守っている中で、皆さん目一杯顔を出しているのです、これも一つの景観となってきます。なので、どういうルールをそのまちに設定するかというのが、最終的にそのまちの風景やまちのにぎわいに連続しています。



元町仲通り 光環境実験

横浜の元町仲通りでは、通常、先ほど言ったように道を明るくしましょうと、行政の人たちにとって一番やりやすい方法をとっています。こちらは道は暗くていいじゃないか、それよりも道の凹んでいるところを明るくしていったほうが防犯性が上がるのではないかということを実際実験しました。やはりこちらが全然安心だねという話になり、論文も作りました。行政の人に納得してもらうためには、建築学会や照明学会にちゃんと調査した論文を出していますということを最初に出すのです。現状ではこんな感じで、電信柱についている状況が、こうなりました。照明がついているのが分かりづらい、1か所くらいの照明しか見えません。あとは全部奥についています。これを見にいった僕の友達にも、何をデザインしたのと言われるのです。何が起きたかと言ったら、夜のお店がとても目立っているのです。レストランがすごく目立ちます。歩いていて、そのお店に目が行くようになります。そうすると、散歩するような人が多くなります。ここ10年でお客さんが4倍が増えて、お店の数が倍に増えています。関東の商店街でお店の数が倍に増えているところは、そんなにはないです。要するに、このまちは地域の人たちが発見や散歩ができて、おもしろいまちに変わっています。それは、お店が目立つようにしたからです。

また、絵看板みたいなものも行いました。昔、お酒を売っているお店だったら、ひょうたん型の看板を出したりしたものです。ここでも1軒当たり制作費3,000円で、学生が2人く

らずつで、お店の人と会話しながら、どういう看板を出しましょうかといっで行いました。今は皆さんが正式に作って出しています。これは何の意味があるかという、お店がまちに顔を出しているわけです。道に顔を出して、道に対して目立つようにしているというところが、実はこのまちの魅力につながっているのではないかと思います。

あかりというと、もう1個は祭りがあります。今回の「水と土の芸術祭」も祭りがくっついていますが、祭りというのは、一般的に非日常的な空間です。お祭りで提灯があったら盆踊りをやっているとか、たいまつや精霊流し、盆踊り、いろいろなあかりのお祭りというもの、宗教的なことも含めてご覧になっているのではないかと思います。

ろうそくを使うあかりのイベントを曾我部さんと前に行いました。横浜の寿町という家に帰られない労働者の方々がたくさんいるエリアがあるのですが、そこでこういうふうなあかりを作ったりしました。

また、これはアメリカのシカゴで撮った写真ですが、前の日まで空き地だったのです。ところが、次の日に行ったら遊園地が変わっていて、人はいないのですが、試験的に運転しているのです。日本ではあり得ないのですが、アメリカだとこういう大きなものを道路で運べる、そういうエリアがあり、空き地が次の日になると遊園地になるというすごい光景がありました。

これは電照菊と言われているものです。左下にあるのは電照菊が有名な愛知県の田原町、上は沖縄です。沖縄は暖かいからビニールハウスがいないのです。夜中の1時くらいに急にこんな感じになります。こういうものも地域のあかりとしては非常に文化性があって、物語があるなと思っています。

これは何でしょうか、分かりますか。江ノ島です。ちょうど今ごろ、ウナギの赤ちゃんをとっているところです。白魚とっていいのか、すくってとって、おちょこ1杯1,000円から3,000円で業者に売っています。これも季節感がある一つのあかりかなと思います。その向こう側には、湘南のまちのあかりが見えています。要するに境界を飛び越えるということは、実は協働作業が発生しています。協働作業といったのは、同じ民間の人でもAさんとBさん、行政の方でも道路課と公園課、場合によっては市と県と国みたいな、そういう領域を飛び越えていくと、実はそこのまちの本質的な景観なり、そういうのが見えてくるのではないかと思います。

例えば先の八尾も人気を感じるようなあかりを作っていきましょうとやっはいるのですが、ここは崖の上にまちがあるという特徴的な景観を持っています。なので、そこの地域的な、景観的な財産をもう一回再認識してもらおうということを行っています。また、もう一つ、橋を渡ったときに、水を感じるようにしようと、実はここにも仮設のあかりをつけ

ています。このような歩道照明ではなくて、橋を渡る時に、日本人だったら水を見るので、水を感じるようにさせています。こういうようなところの歩道実験など、いろいろ行っています。



七尾和倉温泉まちなみ整備計画

先ほどの和倉温泉には、こういう場所も造っています。水があって、古い民家があって、そこにあかりを少し多めに置いて、ここはライトアップというよりも、水というものを感じるようにさせています。

これは徳島県のひょうたん島で行ったイベントです。ここも同じように水を感じるようにあかりを作っています。

今、越中八尾というところでは、このようなまちのあかりをつくって、それで防犯灯とか商店街灯のような街灯は全部やめて、まちのあかりを作っていこうということをしています。地域のあかりみたいなものを実験しています。今年こういう形で整備していこうということで、県と市と国ということで今行っています。JRなどにも協力してもらい、電球っぽい色に変えたりしています。面倒ですが、それをやらないと前に進まないのです。

いわき市の久之浜というところの、工事の計画に入っています。福島県は、防潮堤のものすごく厚いのを造っているのですが、防潮堤と言わずに、防災緑地という言い方をしています。何となくふんわりとさせた言い方にして、緑地を造っていくということで、今、久之浜というまちで、1.7 キロに及ぶ防災緑地を設計中です。そこで、いろいろなキーワードをもとに、被災地というのは、特に被災を直接受けた人と、間接的に受けた人と2通りあると思っています。間接的に受けた人というのは、まちに残っているのです。そういう人たちがまちを意識しないと、まちというのは何も変わっていかないと思い、いわき市の領域の地域住

民の今残っている人たちに対する意識改善のために、あかりの実験をしました。これは、あかりの実験といいながらも、地域の安全性を実験しましょうということです。こういうことを住民に説明して、いろいろ実験しています。



上州富岡駅+周辺環境整備

これは上州富岡という駅の整備で、上信電鉄と県と市といろいろなところが民間と絡んで、スタディをしながら、計画を進めました。景観として考えた場合は、見える範囲内では県や市、市の中でも造園課、緑生課、福祉課と三つに分かれています。民間も含め、みんなで考えました。結論から言うと、空間の境界部分に光があれば、防犯性も歩行性能も、ドライバーが歩行者を発見するのに問題なく、なおかつ、省エネになる。結果的には、まちがライトアップされ、古いまちなみがすごく目立つようになっています。だから、日中行くと、照明のデザインは何をしたかまったく分かりません。

十日町のアーケードでは、学校の教室よりも明るいような蛍光灯がずらっと並んでいます。もう少し照明を考えたまちのアクティビティを感じるようなあかりにしましょうということで、去年実験をしました。店が閉まっているところと開いているところを踏まえて、赤い光と青い光で分かるようにし、最低限のあかりで場をつくりました。また、交差点のところが人がちゃんと認識できるように啓蒙したり、いろいろ調査をすすめています。

特徴的なまちなみという意味で、大阪の天王寺、通天閣のあるストリートをご紹介します。街灯が消えているのですが、分かりますか。商店街の人たちに聞いたら、この15年程まったくメンテナンスしていないのです。電力会社にお金を払っているが、要するになくてもいい。逆に商店街に全部街路灯がついていたら、きっとこのまちの魅力は半減すると思います。そういうところの意識が日本にはないです。

これはディズニーシーです。ディズニーシーは、実はライトアップしているのは、3か所くらいしかないのです。ディズニーランドというと、すごくガサガサやっているイメージですが、実はほとんどやっていません。

これはディズニーランドです。学生にベニスの写真を見せると、ディズニーシーみたいと言われ、年齢のギャップを感じてしまうのですが、こちらの写真が本当のベニスです。私たちが何かを見て、いいな、すてきだなと思ったことは、頭の中で2倍から3倍くらいで記憶しています。だから、ディズニーランドでは、だいたい2倍から3倍の光にしています。こんないい感じのまちというのは、実際はないのです。これ以上多くしてしまうと、今度は嘘っぱちになります。ベニスと同じくらいの光だと、寂しくなってしまうのです。やはりオリエンタルランドはその辺がはうまくて、ディズニーランドというのはこうだよということを感じさせます。



越後松之山「森の学校」キョロロ

今度は、水を感じる景観をピックアップしました。これは松之山のキョロロという施設を手伝ったものです。この施設は、雪が降っても雪かきをしなくてもいい施設になっています。このようにかまくらのような風景ができるのです。かまくらの中から光が漏れるという景観です。

今度は水の話、伊豆の熱川温泉です。ここも街路灯がずらっと点灯しているところを全部消して、まちのあかりをつくり、人が散策できるようにしました。このときに大事なのは、水を感じられるかということです。なるべく水に光が映り込んで水を感じるようにしています。先に言った八尾などもライトアップするのではなくて、水に映り込むということを中心にやっています。

横浜の黄金町で行っているイベントで、毎年行っているものです。橋を渡っている人を調査したら、100人いたら99人、必ず1回、水のほうに目がいっています。1人、目がいていない人はだれかという、ワンカップを飲みながら歩いているおじさんがまったく周りを見ないで、飲みながら歩いていたという調査結果なのですが、水というのはそれほど目がいくのです。特に橋というのは景観的にも魅力なので、そういうところをもう一回、景観的に再認識してもらおうと、こういう水を扱うときは必ず水に映り込むようなことをしています。

これは中国のシータンというまちで行ったものです。古いまちなみで、そこで実際、人が生活しています。まちの魅力を引き出すということで、いろいろなプレゼンテーションをして、こういうまちのあかりみたいなものを水に映り込むようにしましょうということを行いました。

福島県いわき市では、プレゼンテーションの結果、こうなりました。防災緑地の今できている上からまちを見たところ。日本とは思えないような新しい風景ができあがっています。これはどういう仕掛けかという、まちの中に入ると、暗闇をなくすようなあかりをつくっていきましょうと、今、地域の住民の方々々と実験をして、やっていこうではないかという雰囲気になりつつあります。駅前などもコンビニの裏や昔、商店街のあったときの看板などを残そうとか、そのような話をしています。

さらに、家が流されたところにあかりをつけて、地域の人たちが手を合わせられるようにするよう取り組みをしています。

最後に、新潟で今回何をするのかお話しします。曾我部先生から電話があり、新潟で「水と土の芸術祭」をやっているんだよと、角館さん、少しやらないと言われて、どこでやるのと言ったら、潟でやるのだと言うのです。鳥屋野潟と聞いていたのですが、鳥屋野潟の状況がまったく分からず、聞き流していたのです。しばらくたって、考えようかなと思い、鳥屋野潟をよく調べたら、めちゃくちゃでかい、本当に湖みたいところで、1周6キロもあるようなところでした。電話して、場所が広すぎるよと言ったら、できるでしょうと言われて、巻き込まれてしまったという経緯があります。

鳥屋野潟もぐるっと回りました。典型的な潟は関東だと、例えば霞ヶ浦、土浦というところにもあるのですが、日本はまちの整備の仕方がへたくそで、水面の近くにまちをつくれないうのです。お店とか、まちをつくれなくなっています。そういう文化があります。それは港湾が強かったり、いろいろあるのですが、ヨーロッパやアメリカへ行くと水際に施設があって、コーヒーカップを持ちながら港まで行けるという場所が、いくらでもあるのです。日本だと勝手に行って水に落ちたら誰の責任になるのかということで、そこには必ず柵があります。

そういう意味では、やはり新潟でも水辺との関係が非常に希薄だと思いました。いろいろ調べたら、鳥屋野潟の歴史というのは、まさに新潟のまちができあがってくるベースになっていた場所なのだろうと、そこには、今までの人の思いがあって、重たい空間だなという感じがしました。自然と文化、人の生活観というものをうまく再生できないかなと考えて、「あれっ！」というテーマとしました。

先ほども言ったように、単純に見せたいところにあかりを置いていくことで、鳥屋野潟を再発見できるようなことをしたいと思っています。今のプランは、ぐるりと1周、けっこうすごいことになりそうなのですが、このときの一つのキーワードとしては潟を感じられる景観ということです。生活をしていて鳥屋野潟の水面を感じるところというのは、実は少ないのです。ボートハウスのあたりは、けっこう水際に道路が走っているのですが、あとは幹線道路が周りにいくつかあり、けっこう交通量があります。だから、その川から潟のほうに車で橋を渡っているときに、潟を連続して感じられるようにというようなことをやろうかと思っています。未来都市みたいな、島のところにあかりがあるような、夜になると、急にまちのあかりを見て人の活動ががらりと変わり、その潟に対する思いと、もう一つ、意識改善みたいなことをしようかなと思っています。それに対するアンケートをしながら、別の大学の学生が鳥屋野潟をテーマに卒業論文を作っているの、そういうものとリンクしながら、あかりによってどういうふうに変化が起きて、どんな可能性があるのかということを経験的にやっていきたいと思っています。

特に今、鳥屋野潟は、いろいろな行政の仕組みがあって、見えない線がいっぱいあるので、潟の周辺を地域の人たちが、もう少し利用しやすくなるような場所になかなかできない理由もそこにあたりするので、そういう見えない線みたいなものも今回少しあかりで見えるようにしたら、おもしろいのではないかと私は思っています。なので、あかりによって地域の財産が再認識できるような、そういうことを今回、鳥屋野潟でできる範囲内で実験的にやってみたいと思っています。7月の頭くらいから設営を始めたいと思っています。先ほど言ったような太陽電池のLEDを10メートルピッチで植えていくというような作業です。そういうもので全体の雰囲気を変えたいと思っているので、ぜひともご協力いただける方がいらっしゃったらよろしくお願いします。

(曾我部)

ありがとうございました。

どうして角館さんに鳥屋野潟をお願いしたのかというと、取り組みにくいからです。大きいし、人工的だし、周りは巨大施設しかない、なかなか一筋縄ではいかないようなロケーションにあったので、これは照明、角館さんではないかなと思いました。照明は見えないもの

です。器具は見えますが、光は見えるものではないです。だけれども、狭い意味での建築空間を大きく変えます。それが非常にダイナミックで、見えないものをダイナミックに変貌させるという魅力、その辺がうまい角館さんが向いていると思いました。

もう一つには、角館さんは、僕は大変共感しているし、いい意味ですが、ケチで、無駄なことがきらいです。最初に私が照明を行ってもらった大きな仕事は、NHKのららぽーと財団のもので、NHKからの要望でライトアップしてくださいという話でした。普通に考えると、外から照明をあてますが、角館さんの提案は、そんな無駄なことはやめ、どうしても建物の形を浮かび上がらせたいのなら、廊下やメンテナンス用の照明などの電気を全部つけたら、ライトアップ以上に目立ちますというものでした。

(角 館)

オリンピックのときはいいのですが、その後に、それをライトアップするというのがその地域にとってどれだけの意味があるのかを考えた時、ほとんどないと僕は判断しました。



曾我部昌史氏

(曾我部)

その角館さんの考え方には大変共感できます。今回のことでもそれが活かされるのではないかなと思います。これは体験としてやってみると分かりますが、1万円くらいかけた照明器具でつくっても、そうだよな1万円かけたよなみたいなかんじですが、100円ショップのものを5個くらい並べることで空間が想像以上に劇的に変わったら、嬉しいじゃないですか。角館さんは、1粒で5度くらいおいしくないやらないみたいなのところがあるのです。それで、巨大な鳥屋野潟を相手に立ち向かえる希少な存在だと期待したのです。

(角 館)

いろいろな建築をつくる時に言われるのですが、単純に現場にお金がないだけで、お金があるプロジェクト、例えば「あべのハルカス」は最新のLEDも、全部特注で作ったものを入れたり、そういうことも実際にしています。



角館まさひで氏

(曾我部)

照明の可能性に今日改めて関心を持ったという人がいっぱいいると思いますが、照明を並べるというちょっとしたことが空間を変えてしまうという体験は楽しいと思います。作業のときの様子と、夜、実際に光っているのを見たときの感動、これは本当にやってみないと分からない。

今日改めて気がついたのは、角館さんの話の中で、あかりとか照明という単語の次に頻発するのは、「実験」なのです。社会実験や支援実験。つまり、何かやる前に実験している。「水と土の芸術祭 2015」をはじめとして、アートプロジェクトの一つの可能性というか、役割として社会実験という側面があります。ある種、常識の範囲で我々は日々の暮らしを続けていますが、どこかへジャンプしたほうが、よほど豊かな暮らしにたどり着けるかもしれない。豊かな暮らしにたどり着くための社会実験をアートプロジェクトがやっていくというふうに考えると、まさに角館さんの起用は正解だったなと思います。

(角 館)

できればそういう部分も残しておきたいと思います。僕の立場はアーティストではなく、基本的には建築や都市計画、まちづくりをしているので、こういうところでやった事例が、一つの良い事例としてほかのまちでまた活かされるためには、どういうふうな意味を持ち、何が成功して失敗したかということをちゃんと提示しないと意味がありません。そういう部

分では照明につながるとか、特に地域の財産を可視化するとか、いろいろなことを実験からチャレンジしたいと思っています。

(曾我部)

会場から質問がありましたらお願いします。

(会 場)

事例の中で川越など、古いまちなみの内側からということもありましたが、あかりの光源は新たにつけているのか、既存のお宅のものを交換しているのか、具体的にどのような形で取り組まれているのでしょうか。

(角 館)

2種類です。中にある蛍光灯を電球に変えた場合もありますし、どうしても家の光という均一の光が多いので、大きな面が、例えば和紙の面があったら、均一に光るよりも端っこにポンと光っているほうが、何か人気を感じるわけです。そういう場合、そこに別の光源を置いたりします。特に合掌造りなどは、そういう状況です。合掌造りは、三角のところは吹き抜けになっていて、中に光を1個入れると、均一に光ってしまうのです。それを立体的に見せて、わざと意図的に近いところ、遠いところに小さな光を裏側に設置しています。

(会 場)

光の色、オレンジや青というのは、どのように使い分けしているのですか。

(角 館)

電球色と言われているオレンジ色の光というのは、日本人は大好きなのです。ところが、台湾の屋台は、白い蛍光灯が多いのです。台湾の若者たちは、白い蛍光灯がポツンとあると、わくわくするらしいのです。私たちは、電球の光とか、特に新潟というまちは少し裏に入るとこじやれたお店がいっぱいあると思うのですが、そういうところの光というのは、だいたい黄色っぽい光を使っていると思うのです。でも、台湾では白い蛍光灯が逆にそういうもののシンボルになっている。要するに私たちにとって光は、一つのサイン的な意味合いがあるので、それによってどういうイメージを相手に伝えられるかというところがポイントだと思っています。電球色がいいというわけではないですが、基本的には電球っぽい光というのは、何となく日本人は人の生活を感じる。そういうものとは一線をおいて、別の見せ方をしたいときには、逆に赤や黄色など少し色を使うようなことはあったりします。



「あれっ！」一潟を再発見するあかりを探そうー 水と土の芸術祭 2015 鳥屋野潟

■角館まさひで（かくだてまさひで） ぼんぼり光環境計画代表、照明家、本芸術祭参加作家

1964年東京生まれ。日本大学建築学修士課程修了。LPAを経て、ぼんぼり光環境計画を設立。

照明に関する数々の国際的大型プロジェクトに参加。あべのハルカス、上州富岡駅周辺整備、富山駅新整備、港北ニュータウン、いわき市防災緑地（防潮堤）、釜石高台避難誘導環境整備などの照明計画を手掛ける。また、数々のまちづくりにも参加し、「光」が主体となるのではなく、「光」なる概念からまちがどのように変容するか実験中である。グッドデザイン賞など受賞多数。共著に『行為から解く照明デザイン』（彰国社）など。

■曾我部昌史（そがべまさし） 本芸術祭建築ディレクター、建築家、神奈川大学工学部建築学科教授

2001年～06年東京芸術大学先端芸術表現科助教授、2006年～現職。

主な作品に〈八代の保育園〉、〈SHIBUYA-AX〉、〈上原の家〉、〈ハンガートンネル〉、〈伊那東小学校〉、〈Y150 はじまりの森〉など。著書に『団地再生計画 みかんぐみのリノベーションカタログ』（INAX 出版）、『POST-OFFICE ワークスペース改造計画』（TOTO 出版）、『別冊みかんぐみ1 & 2』（エクスナレッジ）、『いえのきおく』（インデックスコミュニケーションズ）など。